
グリーングリーン

海松房千尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリーングリーン

【Nコード】

N7765X

【作者名】

海松房千尋

【あらすじ】

久しぶりに故郷に帰ったその理由。

義母からの、久しぶりの電話。

……父の入院を知らせるものだった。

もちろん父に会うのも久しぶりだった。
いや、家族にと、いべきだろう。

昔『あうおね』ブログで掲載していた作品です。
ケータイ文です。

（前書き）

昔書いた、ケータイ文のお話です。

——父親が認知症の診断を受けたのは半年ほど前だったらしい。

一〇年いや、……一二年も会わずにいて、そんなふうになってから会いに行く事になるなんて、随分酷い話だ……。

別に再婚した父がどうしたという訳でもないし、父の新しい妻と腹違いの弟に別段恨みがましいような思いもない。

家を出た理由はそこにいる自分に、いまいちしくりしない……。

それだけだった。

新しい母や産まれたばかりの弟は、間違いなく好きだったのだから——。

「美都子さん」

初めて会った日から、このひとは全然変わらない。

「裕太さん、来てくれてありがとう……」

静かな強さを秘めてひっそりとそこにいる。

「それは、自分の父ですから……」

遠慮されているのは知っているがそれは自分も一緒だ。

この人を母と呼ぶ事への躊躇いなどないはずなのに。

「……そうね」

「それで親父の容体は？」

それだ、父の入院は認知症のせいではない。

心臓が大分痛んでいるらしく、発作を起こして倒れたのだ。

一時はかなり危険で、家族を呼ぶように言われたらしい。

自分が来たのもそのためだった。

「もう全然良いみたい、でも、いつの間にか、身体中どこもかしこも悪くなって……。」

「ごめんなさい——」

まるで自分がそれを責めているような気になる。

「……美都子さんが謝る事じゃない。若いときに調子によって無茶ばかりしてた親父が悪いんだから。それで——？」

「さつき寝たところ。でもまたすぐに起きるわ、ずっとそうだから」

「そうですか。そうしたらちょっと、何処かで……」

煙草が欲しくてたまらなかったが喫煙所は嫌だった。

煙草はあんなところで楽しむものではない。

「中庭が綺麗よ？ 灰皿もあるし、案内しま——」

「母さん！ 裕太兄さん、来てたんですか」

「仁司……君、久しぶりだね？」

義理の弟。

なんと声をかけたら良いのか？
未だにわからない。

「どうかしたの？」

「父さんが、またどこか行っちゃって――」

「え？」

「あの人ったら……」

父は最近徘徊するようになったらしい。
それだけならまだしも、小便の時だけトイレの位置を忘れるらしい。

これには随分手を焼いているようだ。

父には退職金もあるし、それなりの預金もあつたし年金もあるから、生活そのものに問題は無い。

しかし美都子さんは少し痩せた。

「とにかく探しましょう」

「はい、仁司、先生が看護婦さんには知らせたの？」

「もちろん、僕、もう一度上の階見てくるよ！」

慌ただしい話になった。

……さて、ウチならなんて報告するかな？

心臓に障害を抱えた、認知症の男性一名が現在行方不明——男性の身元——通報の時間——そんな感じかな？

！

……驚いた、父だ。

中庭に居たのか。

「親父！ 何してるんだよ？ ここは寒いだろう？ 部屋に戻ろう？」

「裕太、こい！」

「え？」

これが、認知症の人の口調と行動か……？

自分が判るとも思ってたただけに混乱した。
しかもその怖かった頃の父、そのままの口調が混乱に拍車をかけた。

「――親父？」

……認知症だ。

「親父！　ここはトイレじゃないだろ？　おしっこか？」

「裕太、立ちションだ、こい！」

いきなりあの時の光景が蘇って来た。

「親父……！」

父さん、どこ行くの？

すぐそこだ

待って

ほら、こっちだ

……あ！

どうだ？　綺麗だろう？

うん

あれが母さんが生きてた街だ

うん

母さんはもういない

……うん

……見えるか？ あそこに母さんは埋まってる

うん

でもな、あそこには母さんがいるわけじゃないぞ？

……どこにいるの？

どこにいたと思う？

天国？

——見ろ、綺麗だろう？

母さんはな、この全部と一緒になってるんだ。大好きだった、この街のこの景色になったんだ……わかるか？

うん

裕太

なに？

立ちションだ

え？

こい

……う、うん

俺達はな、生きてるんだ

うん

生きてるんだから――

……だからこれでいいんだ

………わかった

この景色、絶対忘れるなよ

うん

「――親父、生きてるんだよな、俺達………」

なんで忘れてたんだろう。

いくら拭っても、涙がとまらなかった。

「裕太さん……？」

「ほら親父、お母さんが迎えに来てくれたよ？ すいません、お母さん、あとお願いします……」

三日後——親父は結局、風邪をこじらせ、肺炎で逝った。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7765x/>

グリーングリーン

2011年10月20日23時09分発行